

京月 日 業庁 2001年(平成13年)9月8日

私の視●点 ● ウィークエンド

◆野球 本質崩す安易な審判批判



去る8月16日のヤクルト対横浜戦で、横浜・佐伯の左翼への飛球を、2塁審判はヤクルトのラミレスが直接捕ったとして、アウトと判定した。しかし、森監督らは「ワンバウンドだ」と抗議、試合が中断し、森監督が試合続行を拒否したため退場処分となった。

翌日、捕球誤審とした森監督には嚴重注意が、審判には10日間の謹慎処分がセ・リーグ会長から下された。横浜は処分を保留していたが、その後、受け入れ

すずき 鈴木 秀雄 関東学院女子短大教授 (スポーツ社会学)

た。その上で横浜は①審判の能力向上②判定をめぐる事件を減らす仕組み、の2点を求める要望書をリーグに提出した。

この点について、私は審判への安易な批判は、スポーツの本質をゆがめてしまっていると言いたい。スポーツは時代とともにイギリス型からアメリカ型に変わってきた。審判数も少なく、自己判定に任せられ、選手の交代、補充、タイムをとることさえ自由でなかったころの選手自身の訓練だったものが、観衆に見せる、勝敗を重視したものになってきたのだ。

だが、スポーツの本質は変わっていない。それは非日常性であり、競技性を持ち、規則性があり、フェアプレーが存在することである。バットを振るといふプレーを認識し、判断し、行為として判定するのが審判である。スポーツとは、主観的判断が持ち込まれる要素を規則性からも強く持つて成り立っている。

ことになる。監督や選手が誤審と判断し、覆すことを迫ること自体も、また、主観的判断なのである。

そもそもアピール行為として認められるのは、審判の判断に抗議することではなく、判定を再度確認する範ちゅうのものである。

だからこそ常に、ゲーム管理者には、審判技術の向上が、また、ゲームに励む者にはルールの順守が求められる。判定に従い、ゲームを速やかに進行させる姿勢こそが、正々堂々と戦うフェアプレーの精神である。互いが折り合いをつけることも、スポーツの本質だということを理解しなくてはならない。